福田寺跡を訪ねようとして思いがけず出合った「鬼の窟古墳」。私たちの住む町のいにしえの物語を、今に伝える場所です。

懐かしい原風景 川内田地区

内寺をさらに東に進むと、川内田という地区にたどり着きます。稲刈りを待つのどかな田園が広がり、懐かしい日本の原風景に出合えます。

地区を流れる赤井川の水は清らかに澄み、夏にはホタルが飛び交う幻想的な光景が見られるそうです。

町の中心部から、少し足を伸ばすと、こんなにも美しい山里が残っていることを知ります。急いて流れる日々の雑音など聞こえず、この土地で営まれている、昔ながらの暮らしの豊かさを感じます。

内寺地区を東に進むと川内田ののどかな風景が広がります

夫婦で汗を流して 太秋柿栽培

さてこの季節、福田地区で栽培が盛んな太秋柿が収穫期を迎えようとしています。朝早くから畑で汗を流していたのは、南地区に住む後藤尚明さん(62)と妻の奈保子さん(62)です。樹齢を重ねた柿の枝には、今年もたわわに太秋柿が実っています。

「太秋柿を育てるようになって10年になります」と話す尚明さんは、かつて町役場に勤務していました。53歳で早期退職し、父親の跡を継いで太秋柿の栽培に取り組みました。

「定年してから跡を継ぐとなると体力に自信がなくて。当時、子どもたちが巣立ったこともあり、就農することを決心しました」と尚明さん。

「夫が『役場はやめて柿ば作る』と告げた時、第二の人生をそうやって送るのもいいかなと反対しませんでした」と話す妻の奈保子さんも同じ役場職員でした。2年前に定年を迎えてからは、内助の功で支えています。

毎年2万個ほどの太秋柿の出荷を目指しているという後藤さん夫婦。「失敗も数々ありました。そがん簡単にはいかんもんです。ばって ん、頑張れば頑張ったしこ返ってくるこの仕事にやりがいを感じています」と尚明さんは話します。

そんな夫婦の楽しみは、奈保子さんの手料理で味わう毎日の晩酌だとか。そして、「朝からのゴミ出しは私の担当ですっ」と尚明さんは、奈保子さんの横で胸を張るように無邪気に笑いました。

誠実な人柄が伝わる後藤尚明さんと、内助の功で支える奈保子さん

袋掛けを外すと、そろそろ収穫が始まります

下草も丁寧に刈られた、後藤さんの太秋柿の畑

後藤さん夫婦が手塩にかけて育てている太秋柿、これから収穫期を迎えます